

9000キロの米加国境

一連の交渉、条約で確立

米国とカナダの国境は、湖や陸地を横切り、河川や入江に沿って、延々八千八百九十キロ（陸上五千六十キロ、水上三千八百三十キロ）に及ぶ。これは赤道円周のおよそ四分の一にあたる。陸地では、幅約七メートルの細長い回廊状の国境地帯が、山を越え、谷をわたり、大草原を横切り、森林をぬって蛇行する。この回廊には点々と標識が並んでいて、一目瞭然だ。見張りはほとんどいない。

大西洋のファンディ湾から太平洋のジョージア、ファン・デ・フカ両海峡へ及び、そして太平洋沿岸をデイクソン・エントランスからセント・イライアス山へ北上し、さらにそこから百四十一度の経線に沿って北極海へと続く米加国境線は、百二十五年にわたる一連の交渉、仲裁、条約をへて、二十世紀初頭、最終的に確立されたものである。

南の国境線は、三つの主な条約によって決定された。すなわち、一七八三年のベルサイユ条約、一八一八年の協約、一八四六年のオレゴン条約である。アラスカとカナダの境



界は、一八二五年の英国、ロシア間の条約、およびその後の米加協定の対象となった。しかし、これらの条約や協約の条項を実際に適用するにあたって、多くの問題が生じたため、さらに十三の条約、協定、外交文書の交換を余儀なくされた。

米国独立戦争を終結させた一七八三年条約は、大西洋からレイク・オブ・ザ・ウッズにいたるまでの国境線をごく大ざっぱに定めているが、双方の満足を得る結果に達するまでには、さらに三つの条約（一七九四年、一八一四年、および一八四二年）を必要とした。

一八一八年の協約は、レイク・オブ・ザ・ウッズからロッキーマウンテンまでの国境を、四十九度線にそって確立した。一八四六年のオレゴン条約はこの緯度線沿いに、国境線をロッキーマウンテンからジョージア海峡まで延ばし、さらに大陸とバンクーバー島の間の海峡を通過して太平洋まで結ぶことになった。しかし、その水域にある諸島の所有権をめぐる紛争が生じたため、問題はドイツ皇帝の仲裁に付された。一八七三年、同皇帝はヘアロ、ファン・デ・フカ両海峡にそって国境線を設ける決定を下した。

一八六七年、米国はロシアからアラスカを買収、これを機に、英国とロシアが一八二五年に結んでいた協定が明るみに出た。領地買収にあたり、米国は事実上この協定にしばられることになった。当時は、まだ国境の問題など大して急を要することではなかったが、その後、ゴールド・ラッシュが始まるにおよび、国境線の確立が不可欠となった。話し合いがつかないまま、国境は一九〇三年、仲裁によって決定され、一九〇六年、標識設



置作業が始まった。

実際の地取り、および国境線の維持は、国際国境委員会の責任に属する。この委員会は一九〇八年、両国が樹木の繁茂で回廊は消え、標識もなくなったり、こわれたりという国境地帯の惨状に気付いて設置したものである。委員は少くとも年一回、オタワとワシントンに交互に集まって会議を開き、仕事の打ち合わせをする。両国は手分けして、国境線上の八千の標識ならびに一千の測地点を検査、修復する。この測地点によって陸上、水上を問わず、国境線上のあらゆる場所を正確につきとめることができる。維持という観点から委員会の役員が最も頭を悩ましているのは、二千七百七十二キロの森林地帯だ。回廊がかくれぬよう、樹木の

成長繁茂に対処しなければならず、一方生態環境の保全も欠かせない。この目的のため、委員会は数年来、国境線上に葉をまいて樹木伐採をしなくてもすむようにしている。定期的な立木伐採の費用に比べ、安上がりで、邪魔なものをなくし、保全の必要ある植物群の改良に役立つ。

国際国境委員会は、税関の機構とも緊密な関係を保っている。たとえば、税関の機能発揮の妨げとなり得る建造工事や、国境線のすぐ近くで行われるのを禁じるために、乗り出してくることもある。国境線にそって、百四十の税関出張所がある。あまり一般に知られていないものもあるが、ナイアガラ瀑布の出張所などは、毎年何百万という観光客で賑わう。